

● 筑摩叢書を読む 3

# 『中国の赤い星』再読



関川夏央

毛沢東のめざした新しい中国を「貧困のユートピア」と表現したのはアルベルト・モラビアである。中国革命とは、あくまでも中国的に発想され、中国的に実行され、世界のどこにも学ばず、また世界のどこにもモデルとしては採用されない中国独自の方法のあまりにも巨大な実践だった。

また中国革命を特徴づけたものは、やはり中国的な清潔さだった。西北の根拠地、陝西省延安で一九四〇年代前半、共産党員の官僚主義的な弊害の萌芽に敏感に反応して実行された整風運動は有名だが、紅軍の道義性と倫理性の高さはすでに長征の頃より紅軍が自ら求め発現させていたものだった。このことが中国革命をして、たんなる二十世紀的な尺度での大事件であることを越えて世界史的な意義を持たしめたともいえるのである。

エドガー・スノーは『中国の赤い星』（筑摩叢書29・松岡洋子訳）のなかでつぎのようなエピソードを紹介している。

「あるとき賀龍はボスハルトというスイスの宣教師を逮捕し、軍法会議は謀報のかどで彼を十八カ月の『刑』に処した。賀龍が長征に出発したとき、ボスハルト牧師の刑はまだ満期には達しておらず、軍と一緒に前進するよう命じられた。長征中刑期が満了になると、彼は釈放され、雲南府までの旅費を与えられた。多くの

人びとが驚いたことにボスハルト牧師は賀龍について殆んど非難せず、逆に『共産主義者たちがどういふものかもし農民が知っていたなら、誰も逃げだしたくないだろう』と言ったといわれる。スノーは一九三六年六月、宋慶齡の援助で、ある未知の大学教授から毛沢東あての「隠頭インクで書いてくれた」紹介状をもらい、単身「紅匪」と接触を試みた。おりしも紅軍は前年の一〇月に「長征」を終え、延安に根拠地を建設中だった。スノーはこの地で、毛沢東、朱徳、周恩来、博古（秦邦憲）らと会話し、その理念と生活をつぶさに見聞し、さらに世界史上もつとも困難な旅のひとつとなった「長征」を経験者の口から直接聞きだして記録にとどめた。

一九三四年一〇月一六日江西省東南端の中華ソビエト共和国首都を出発した紅軍は約一万キロを移動し、まる一年後の三五年一〇月二〇日、第一方面軍先鋒隊が陝西省の根拠地に到着。ここですでに三三年から基地を設立していた第二五、二六、二七軍と合流して史上最大の行軍を終えることになった。十万で出発した紅軍は「長征」完了時には二万を数えるにすぎなかった。

紅軍は三六八日間の行程の二三八日を昼間の行軍に、一八日を夜間行軍に費し、一〇〇日を休息に使った。しかし休息のうちの

五六日は四川省北部でまともな消費され、行軍中の休息は四四日のみだった。換算すると、一八二キロメートルの行軍につき一日の休息をとり、一日平均の速度は三八キロメートルという非機械化の大軍としては驚異的なものだった。この間に紅軍は一八の山脈を越えた。そのうちの五つは年中雪をいただいていた。また二四の河を渡り、二億以上の人の住む一二の省を通過し、六二の街を占領し、十人の軍閥の軍と戦い、これを打ち負かしたのである。

スノーは記している。

「紅軍の西北への行軍は疑いもなく戦略的な退却であり、それは地域別の決定的敗北により余儀なくされたのであったが、ついに目的地に到達した時には、中核は以前のままであり、また士気と政治的決意も衰らぬ強さであった。」「ある意味では、この集団移住は史上最大の武装宣伝旅行であった。」

この最後のパラグラフは、毛沢東いうところの「長征とは革命のための種まき機だった」に照応している。

だが「長征」には、スノーや毛の楽観的表現のみで充足しない側面も大いに存在したと考えられる。「長征」は蒋介石の敵次にわたる包圍攻撃（圍剿）によって首都・端金をも捨てざるを得な

くなったから開始されたのであり、客観的にみればその行程は敗走につぐ敗走だった。その意味では「長征」よりも「ロング・マーチ（長行軍）」の方が史実の呼称としてはより適切である。

毛沢東の楽観主義は毛沢東思想の特質のひとつであり、中国革命という気のおおくなるような大事業の実効的牽引力ともなったのだが、それはさらに別の側面でも影響力を発揮し、後年の中国の行くべき方向を揺るがせる結果にもなった。

中嶋嶺雄氏はつぎのように述べている。

「ひとつの火花も広野を焼きつくすことができる」という彼の信念は、ある意味で徹底した敗北と挫折の窮極において自覚されたオプティミズムであり、このような自覚的オプティミズムに支えられてこそ、毛沢東はやがて革命の成功を展望しえたのであり、そうした展望のもとで苦難の中国革命を指導しうるようになったのである。また同時に、こうした自覚的オプティミズムが、毛沢東個人の強烈にして執念的かつ唯我独尊的な個性と相関的であることはいままでもなく、やがて中華人民共和国の最高指導者としての晩年には、不可侵にして超俗的な毛沢東家長体制の形成へと転じていったのである。」（『中国—歴史・社会・国際関係』

# 遊びの時代

高内壮介著 四六／二四八頁

一四〇〇円

遊び下手の日本人に贈る、遊びの意味とそのあり方

- ▼遊びの時代の予知 文明変革の地設計
- ▼遊びと仕事(一) 遊びをうしろめたいものにした日本の古代的賤民性
- ▼遊びと仕事(二) 遊びと仕事における日本型と西欧型
- ▼科学的創造について 変身者としての自我と対比者と遊戯
- ▼青少年時代の悪い出 遊び、そして悦
- ▼遊びと時代 遊びにおける変身型と古型
- ▼日本の遊歩のパターン(一) 西行型と一編型
- ▼日本の遊歩のパターン(二) 西行型と村話者
- ▼遊びと生命 生命の遊び

八坂書房

〒101 千代田区猿樂町1-5-3 鈴木第一ビル ☎03-293-7975

中華人民共和国成立以後の道程を眺めるとき、にわかはこのよ  
うな見方が説得力をもってくる。中国の振幅はあまりにも巨大で  
あり、ときどきわれわれの視界と想像力の範囲をはずれるほどだ  
った。

毛沢東の最初のつまずきは、一九五七年五月の「百花齊放・百  
家争鳴」である。熱狂的言論の自由は痛烈な党批判としてはわか  
えってきた。党中央は翌六月には「毒草刈り」と称した右派弾圧  
を行なわざるを得ず、急激に開花した北京の春はさらに急激に枯  
越せしのである。五八年には「十五年でイギリスに追いつき追  
越せ」を標語にかかげ、庭先の土法高炉と人海戦術に代表される  
「大躍進」政策の無残な失敗があきらかに、毛沢東の指導力  
に大きなけがりがさした。「毛沢東体制下の非毛沢東化」が着々  
と進行するなかで、権力闘争としての文革の伏線がしかれ、「貧  
困のユートピア」という中国革命の基本的理念の色が少しずつ薄  
れはじめた。

やがて文革は文字通り荒れ狂う嵐となって十億の中国人を巻き  
込み、疲れてさせ、ついに激動の一九七六年を迎える。この年  
月には河北大地震、四月五日には天安門事件が起こり、七  
月、一〇月七日、四人組が逮捕される。翌七七年七月鄧小平が二  
度目の復活を果たし、八月、中国共産党十一全大会で「四つの現  
代化」をはじめ党の方針として銘記された。この時点で「貧困  
のユートピア」は再び望み得ぬ夢となったのである。

その後の中国は鄧小平ら党官僚指導によってある程度の安定を  
みつつも、第三者には不安を感じさせるほど急速な開放政策を進  
めている。さながら体中に無数の亀裂を走らせた巨象の歩みのこ  
とくである。

ではスノーの著作はすでに過去の遺物となったのだろうか。  
答えはあきらかに否である。中国革命はやはりスノーの描いた  
世界から出発したのである。「貧困のユートピア」を理想とした  
毛沢東が、そのたぐいまれな資質と方法でつくりあげたシステム  
によって逆に権力闘争への参加を強制されたように、中国人もま  
た自らの資質によってリアリズムの復讐を受けざるを得なかった  
と考えられる。社会のシステムはかわっても社会の構造はかわら  
ない。中国には歴史の厚く堆積した非移動性の極度に高い家父長  
的社會があり、血縁的地縁のネットワークがはりめぐらされてい  
る。それを支えているのは天性のリアリストたる計算に長けた十  
億の中国人である。その意味では、中国人はどのように歴史が旋  
回しようと、希望的にまた絶望的にあくまで中国人であり、中国  
人も確かに中国人そのものだった。理想主義が残酷に現実主義  
に圧殺されたのではなく、理想主義の内部にもともとその必然性  
は隠れていたと見るのが妥当である。

『中国の赤い星』は希望の追憶として読まれるべきではない。現  
在と過去の両面から接近されるべき本である。いうなれば使用  
前、使用後と読まれ、再び使用前にたちもどって研究されるべき  
本である。中国革命の歴史的意義がその後の試行錯誤によっても  
なんらそこなわれないように、この本の価値もやはりか  
ルターシュの二大要件を満たした偉大な著作である。麻雀牌売り  
のたえず広州の珠江のほとりを、上海の自由市場の資本主義的  
喧騒を目撃したのちでも、やはり読まれつづける必要がある。苦  
さど快さ、希望と不安、人間のなした偉大さと人間の歴史とい  
う怪物の前での卑小のすべてを内包した驚くべき著作である。

(せきかわ・なつお ノンフィクション・ライター)

### 高史明『生きることの意味』／岡部伊都子

金春明が六歳、金天三(著者)が三  
歳の時、産んだばかりのみどりごをもこ  
の世に遺して亡くなった裴景順とは、ど  
んなに優しく深い魂を秘めた女人だっ  
たろうか。

貧しい石炭仲仕として働きぬいた父、  
金善辰の重い記憶を克明に心身に刻みつ  
けて成人した高史明氏は、「オンマアの  
墓」以外には何一つ遺品の無い母を、ど  
う想像しようもなかったといわれる。だ  
が、氏には、オモニ魂がふくよかに息づ  
く。大容の人だ。

一九七五年になって、初めて『生きる  
ことの意味』を読んだ時、至るところで  
「ああ、ああ」とうめく気持ちだっ  
た。何とない気なものか、わが「悲し  
み」は何の悲しみでもなく、わが「不  
幸」は、何の不幸でもなかった。小さな  
時から「死にたがり」だった少女時代を  
思っ、「美の意味」よりも「死につい  
て」書きたいなどと言っていた甘えが、  
この一冊に、ふっとんだ。

「日本にめざめる一つのいとぐち」と、  
鶴見俊輔氏は解説しておられる。たしか

に、わたくしにとっても「日本国の、そ  
してわたくし自身の、正体にめざめるい  
とぐち」であった。

朝鮮民族の豊かな人間性、すぐれた素  
質、そして限りなき可能性が、へ日韓併  
合下、日本の旺政によって意図的に凍  
らされ、流され、殺されてゆく。その当  
時の日本人として平気で見過してきた一  
つ一つ。それは、朝鮮民族のやわらかな  
心の血涙にみだされているものだった。

日本の「皇民」教育に、「朝鮮の誇り」  
を奪われつつある少年に、まっ正直に朝  
鮮を生きているアボジは「日の丸」より  
「モットキレイデ、モットイイ旗」を教  
える。そしてはっと気づいて、真実さび  
しい沈黙にこもる。

いじめの級友へとびかかって、なぐ  
る。そのさびしさを著者は「他人を傷つ  
ける暴力は、自分をその暴力のなかに閉  
じこめる」と知った。

思い余った父が死のうとするのを、兄  
弟でしがみつつき、どさっと落ちて助かる  
恐怖の底の生きているよろこび。「生き  
ているということはなんと悲しくこっけ

いなことでしよう」

著者は、日本に苦しみられたにもかか  
わらず、敗戦後「困っている人を助けて  
こそ、ほんとうの解放」と言えるみごと  
な朝鮮人を父とし、高等科へすすんで勉  
強したいのにあきらめて弟を学ばせた兄  
に力づけられて育った。その少年の日  
を、よくもここまで率直に、描き切れ  
たものと思う。この作品に学んだ敬意と  
感謝とは、今もなおあらたである。

けれど……、この尊い真実が、多感な  
少年には、他者への光明とは異なる衝撃だ  
ったかもしれない。  
「感動的な出版記念会でした。お一人子  
の岡真史君も来ていらっしやいました  
が、すてきなお子です」

そううかがって喜んでいたのに、その  
夏、真史君の自死に絶句した。「ぼくは  
うちゅう人だ」(『ぼくは12歳』)の清らか  
な声が、切なく尾を曳く。生きることの  
意味は、どこまでも重い。以後の御夫妻  
はおびたらしい数の少年少女を照らして  
こられた。そこに亡き人の志を重ねて。

(おかべ・いつこ 作家)